私にできるバリアフリー

高槻市立第二中学校二年　清原　和花子

私は、中学一年の時の総合の時間に、目かくしをして歩く体験と、点字を読む体験をしました。友達に介助してもらいながら、目をかくしてろう下や階段を歩きました。その時私は、友達が横で支えてくれていたのですが、ろう下で転んだり、何かにぶつかったり、階段をふみはずしたりしないだろうかととても不安でした。目が見えない人は、こんなに不安な思いをしているんだと思いました。いつも何気なく歩いているろう下や階段が、全く別の場所のように思えました。点字は、点々の数や配置を覚えるだけでも難しかったです。それを指先でさわりながら、読むという作業は、本当に大変だと思いました。

また、昨年、国語の授業で、「ユニバーサルな心を目指して」という視覚障害者の方が書かれた文章について学びました。視覚障害

者にとって、点字表示があっても音声案内のないエレベーターは目の前でドアが開いても、上に行くのか下に行くのかが分からず、また、何階に止まったかを知るために、そのつど降りて確かめなければならない事、現在、視覚障害者のうち、点字が読める人は、十人に一人か二人しかいないという事を知りました。

また、駅のプラットホームの「黄色い線」は、健常者にとっては「黄色い危険ライン」ですが、視覚障害者にとっては、「生死を分ける」道という誘導ブロックである事、そして、そこに立って電車を待ったり、大きな荷物を置く人がいて、視覚障害者が危険な状態にあるという事を知りました。私は、いつも使っているエレベーターや、「黄色い線」について改めて考えさせられました。マンションのエレベーターに音声案内があるかを確認したり、駅のホームや道で、黄色い線＝誘導ブロックをさまたげないように気をつけるようになりました。

「元気でユニバーサルな心のある社会」を実現していくということは、「全ての人が元気な心で暮らせる社会をつくる方向を正しく見つめる」という事を学びました。

障害は、特別なものではないと思います。生まれつきのものだけでなく、だれもが事故や病気、または年をとる事で、体に不調が起きて、障害者となる可能性があります。障害のある人が、安心して生活できる社会は、みんなにとって良い社会なのだと思います。

他にも、健常者にとっては便利でも、障害者にとっては「不便」になってしまうという事が、街のあちこちにあるそうです。例えば、コンビニのおにぎりの包装が開けにくい事、音声案内機能がついていない銀行のATMは利用しにくい事、どちらが入口か出口か分からない駅の自動改札口などです。

また、道路にある点字ブロックは、すぐ横に電柱が立っていたり、ブロックの上に駐輪してあったり、使いやすい状態ではありませ

ん。

バリアフリーとは、障害のある人やお年寄りが、行動する時にじゃまになるものを取り除いた状態をいいます。バリアには、段差や階段などの目に見える障害である物理的バリアと、障害者に対する偏見や無理解などの心理的バリアと、障害のある人が職業の資格や自動車の運転免許をとろうとする場合などに制限されるような社会的バリアがあります。どんなに物理的バリアがなくなっても、心理的バリアや社会的バリアがある限り、本当のバリアフリーとは言えません。三つのバリアがすべてなくなる事が大切だと思います。私は、障害者が健常者と同じように暮らせる事があたりまえになるような社会が一日でも早く来てほしいと思います。

私には、物理的バリアや社会的バリアを取り除く事はできませんが、心理的バリアを取り除く事はできると思います。「席をゆずる」「声をかける」「手をさしのべる」など、思

いやりの心で接したいと思います。

小さな事かもしれませんが、私にできる事を積み重ね、本当のバリアフリーな社会が実現するために少しでも役に立ちたいと思います。